



ものづくり知多半島

「儲かる」システムを確立して リサイクルをもっと身近に 株式会社カネミヤ



板金加工メーカーのサラリーマンから脱サラし、平成元年に株式会社カネミヤを設立した間瀬隆夫社長。当初より、自社ブランド製品の開発・販売を行う、オンリーワンの企業になることが夢だったという。

限られた資源を有効に活用し、地球環境の危機を救おうと、リサイクル事業の必要性が叫ばれるようになって久しい。ところがいざ現実を目を向けると、その取り組みはおせじにも順調に進んでいるとは言い難い。なぜだろう。理由は簡単。資源の再利用化には、多大な労力も、人員も、コストも必要になってくるからだ。

こうした現状に二石を投じ、「儲けるリサイクル」を提唱する会社が、地元の半田市にある。株式会社カネミヤだ。なんだか話がかみあさるようだ、まゆつば物かもしれないぞ、そんなふうに見える人も多いかもしれない。でも、同社の間瀬隆夫社長の話を聞けば、きつと誰もが納得することだろう。いや、現実には多くの大手食品メーカーなどが、同社の製品を導入したことにより、着実に利益を生み出しているのだから。

食品メーカーなどにとって悩みのタネは、肉や乳製品、油脂などさまざまな残存物が付着した使用済みポリ袋やプラスチック容器の処理。分別・洗浄しようとすると膨大な水が必要とするためコスト



高になってしまふ。洗浄せずに処理しようとすれば、産廃処理業者に頼んで、焼却か埋め立て処分しか方法がない。だが、それでは有毒ガスの発生や温暖化など、環境に及ぼす影響は少なくない。

こうした諸問題をクリアするのが、同社が開発した「BUN・SEN」だ。同社はもともと、間瀬社長が脱サラ後、精密機械板金会社として設立した会社。そのノウハウを生かして開発された「BUN・SEN」は、汚れたビニールやプラスチックを分別・洗浄できる機器。高回転の遠心力と摩擦力を利用して、必要な水は1時間にわずか20リットルという低コストを実現した。

これまでは不可能だった付着物の分別・洗浄・脱水を1台で実現するポリ袋自動分別洗浄処理機「Bun-Sen」。今年5月には、リそな中小企業振興財団が主催する「中小企業優秀技術・新製品賞」で、優秀賞と技術経営特別賞を受賞した。



これまではリサイクル不能だった汚れたビニールやプラスチックが、ネクタイホルダーやシャープペンシル、マーカー、ドリンクホルダーなどの材料にリサイクルされていく。

機器の開発・販売だけではない。さらに同社は、洗浄後の廃ビニールやプラスチック、牛乳パックの引き取りシステムを確立。こうした廃棄物は同社のグループ会社が買い取り、ボールペンや建築材、ノベルティーグッズなどの材料として再生される。たとえば牛乳パックを例に取れば、これまでは企業が1キロあたり約40円を産廃業者に支払って焼却していたが、このシステムでは1キロ当たり約5円の有価物に生まれ変わる。同社が提唱する「儲かるリサイクル」とは、まさにこの部分だ。

「廃棄物が発生するその場で、再原料化するというシンプルさのうえ、排出する側も、私もメーカーも、再生樹脂メーカーも、三者がすべて利益が出るという画期的なシステムだと自負しております。このようなシステムが広まっていけば、リサイクルは誰にとっても身近なものとなり、地球環境にも貢献できるのではないのでしょうか」と間瀬社長は胸を張る。



株式会社カネミヤ
半田市八軒町128 0569-23-2871
<http://www.kanemiy.co.jp>
社名のカネミヤは「がんばろう、粘り強く、みんなでやろう」の頭文字に由来する。